

弘法大師の水（丹南町）

弘法大師が味間〈あじま〉にやって来られた時のことです。衣〈ころも〉は破れ、ひげは伸びほうだいという、見るからに、みすぼらしいお坊さんです。「ああ、今日もよいお天気じゃ、こんなに日和〈ひより〉続きじゃ百姓が困るわい。」と、つぶやきながら、よぼよぼと歩いて行きました。よほど疲れているとみえて、北村までやって来た時、大きなけやきの木陰〈こかげ〉に腰をおろして、「ああ、のどがかわいた、おばあさんや、まことにすまんが水を一ぱいくださいな。」と、たのみました。見ると、あまりにも乞食〈こじき〉姿のお坊さんなので、「水かいな、わしの家で使うだけの水で精〈せい〉一ぱいやで、お前さんなんかにやる水は、これぼっちもないわ。」すげなくことわられてしまいましたので、お坊さんは仕方なく味間南をさして歩いて行きました。

南の川も水はなく、溝もからからになっています。村の入口で、せっせと草刈りをしていたおじいさんに、「すまんが、水を一ぱいだけくださらんかな。」と、たのみました。「はい、はい。おやすいことで。」

お坊さんは、汲〈く〉みたての水を一ぱいだけもらって、飲みほしましたが、あまりにも冷たい水でしたから、のどがキューと鳴りました。「ああ、おいしい水じゃ、これで生き返った、どうもありがとう、ありがとう。」何回も何回もお礼をいいました。

そして、山すその草むらに行って、持っていたつえをつきさして、「ここは、きれいな水のわくところじゃ、掘ってみなさるがよい。」と、いい残して、どこともなく立ち去ってしまいました。

村人たちは、教えられた通り、みんなで掘ってみますと、コンコンときれいな水が湧〈わ〉き出して来ました。「これはありがたい。ありがたい。でも不思議なお坊さんだ。」誰もが口をそろえていいましたが、それが弘法大師だったことは、後の世になってからわかったのです。

今でも南の部落では、きれいな清水が湧き出していますが、北の住吉川は、雨の降らない限り、いつも水がなく、川原の石が白くなっています。

